

たより

『美紗の会』 ニユース

第22号

平成九年一月二十日

発行者 「美紗の会」
03-3441-2726
編集責任者 川邊紀恵

ふりかえって想うこと

西松布 咏

今年で美紗の会の「たより」も皆様のお蔭で二十二号になり、今では会員以外の愛読者も増えてヨチヨチながら歩み続けています。

紗の会の方々の暖かいご理解と変わらぬ応援をして下さる皆様のお蔭と深く感謝いたしております。

昨年省みますと色々な出来事がありました。

久しぶりに執筆するにあたって一号を読み返してみますと、平成四年七月創刊で、ゆかたざらいの楽しい記事と、はじめての海外公演の予告が載っていました。はじめてというのは何事でも不安なもので、特にいくじのない私は、おさらい会も師匠として舞台を務めることが出来るかしらと、眠れない夜が続いたしアメリカの旅も、日本人にすら敬遠される邦楽が外国人に受け入れられるかしらとまさに敵地に向かう兵士のような気持ちで飛行機に乗ったものでした。

あれから五年の月日がたち今年には三月にウエスリン大学で私のコンサートが開かれることになっています。こうした歩みを続けてゆけるのも美

で、ふじ丸船上の「汐風がはこぶ江戸情緒の夕べ」この時は会員の皆様がひとつになってお客様を動員して下さい、花柳千寿夫の見事な踊りに加えて、和やかなパーティーのひとつと心が、忘れがたい思い出となりました。

九月十八日岐阜市主催の織部連の発会記念公演に参加させていただきました。岐阜県の梶原知事と、編集工芸所長松岡正剛氏により作られた「織部連」は、古田織部をクローズアップすることにより岐阜の文化を世界にアピールしてゆこうとする文化団体で、当日は各分野の名士が四百名ほど集まりました。私は、端唄「織部好み」を作曲し、織部や、長良川を盛り込んだ唄を発表し、会のみならずの発展を折って多いに唄いました。

秋には、いくつかの国立劇場での舞の会の地方を務め、十一月二十六日三越名人会には、他流の舞い手や地方が競うなかで、閑崎ひで女師の「ぐち」の地方を努めさせていただきました。

「布歌さんは、天性の美声をお持ちなのだから、声を大事にして下さい。これからますます楽しみにしていますよ」と仰言って下さったのに残念でなりません。

五月二十二日美紗の会主催

度考え直さなければならぬことを痛感いたしました。

そんな時は、時を越え、国境を越えて共鳴し、喜びも悲しみも包んでくれることを確信いたしました。

生きてゆくことは唄うこと。唄うことは生きてゆくこと。年と共にその想いが強くな

ってまいりました。今年も元気で精いっぱい皆様と共に唄ってゆきたいと思えます。そしてこの秋には美紗の会十五周年にあたってお祝いの会を開きたいと折念しておりますので、どうぞよろしくお引き立ての程お願い申し上げます。

本年度予定

二月九日(日) 第十五回美紗の会おひきぞめ 銀座ニユーアサヒ「くつろぎ」

三月一日(土) 花垣の会 閑崎ひで女、清女舞の会 米莊閣 五時

三月二十八日(金) コネチカット州ウエスリン大学ワールドミュージックホール 西松布咏コンサート 八時

四月二十六日(金) 虹の会 山村千代恵、西松布咏ジョイント公演 白金八芳園白鳳館 三時

六月四日(水) 華の会 閑崎ひで女 舞の会

蘆湖の会

去る十一月十九日国立劇場にて花柳龍二の主宰する「蘆湖の会」を鑑賞した。布詠師匠も地唄舞の地方として水鏡と古道成寺の二番に出演された。

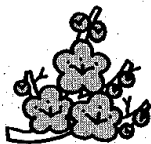
「蘆湖の会」は衣装や伴奏音楽を現代風にするなど色々斬新な手法を取り入れて日本舞踊を創造的改革していこうとする意欲の感じられるグループであり「おやおや」とか「うーん」とか「これはこれは」とか「これ」は、布詠師匠の出演された演目は正統な地唄舞であった。

就中「古道成寺」は娘道成寺のストーリーの原型なのか、わが家を定宿とする客僧、山伏に惚れた娘が毒蛇となつてどこまでも追いかけていく——という女の情念を描いた長編物語で、布詠師匠は西松孝子さんの琴との息もあつてなかなかの熱演であった。出だしの低いところは前日川辺さんから移された(?)風邪のせいもあり苦しそうであつたが、高音部に移るに連れて声の調子も良くなつてきて立方の花柳龍三保の娘と花柳染男の山伏のご両人も気持ちよく踊られていた。

とところで昨今色々な踊りの会、邦楽の会等に参加し伝統

芸を鑑賞する機会が多いが、回を重ねるに連れてその良さが判ってくるようにはなつてきたし、演ずる側も色々新しい試みを取り入れ、素人でも興味を持って鑑賞できるように努力しておられるのを感じる。しかしそれにしては自分の肉親や知人、友人が出演しているのだから自分自身から積極的に見ようと思うほど面白いとはいえない。これはオペラ、バレエ等西洋の伝統芸も同様である。いずれも超一流でないお客が集まらないし採算がとれない。これらの伝統芸を続けるためには身内や知人の他にもその芸又は芸人に惚れてスポンサーとなる人が必要なのだろう。

(本郷記)



会員紹介 佐久間 俊 治 さん

美紗の会の前会長佐久間さんはいつも冷静沈着、その方の素顔はどんなかしら、とご自宅までおしかけて取材をしてきました。

荻窪の閑静な住宅地にあるお宅はちょうど実りの季節で、柿・花梨・ゆずが広い庭に沢山なっていました。

子供の時から荻窪育ちで、西高校、東大法学部を経て、昭和三十年三井船舶に入社。

最初は日本郵船に入社を希望していたのだが、当時は不況で新卒の採用がなかったのので、大阪商船か、三井船舶を受けようと、まず大阪商船の方に行ったら、成績が悪すぎる(これには理由があります、後述します)と言って断られ、三井船舶に入社することになったそうです。その後両社が合併することになったのは、周知のごとく。

当時は入社式に辞令をもらうと、すぐその日に任地に赴任しなくてはならなかったのので、板野さんほか二名と共に夜行列車「銀河」で神戸へ行ったそうです。

い娘さんを見そめて、結婚し、その後バンクパー三年、リオアジヤネイロ二年と海外生活をしました。自宅の応接間にはアルマジロのはく製や、牛の敷物、石でできたテーブル等当時の思い出の品が沢山ありました。

もう一つ佐久間さんといえど忘れてならないのはゴルフ。新人社員の頃から始めて霞ヶ関のメンバーで、今でも年間五十回位はコースに出られるとのこと。学生時代は高校、大学と野球部に所属し、大学時代はほとんど合宿所で生活していたので、授業にもあまり出られず、前述の成績と相なった次第だそうです。神宮の六大学野球にも出場し、同時代の名選手(藤田 秋山等)とも対戦したそうです。

さて、佐久間さんの小唄のうまさはご存知の通りですが、彼が入社する前は三井グループではけいこの時はアルコーはなしだったのが彼が入ってから、アルコール入りになったそうです。今ではけいこか飲み会かどちらかわからなくなってしまうているとは、師匠のお言葉です。

そして奥様はなんと亡くなるまで謡のおけいこをしていらると信じていて、佐久間さんもあえて、小唄といひ直さないとところが、おおらかな血液型の型らしいところ。家の中のことも全面的に奥様を信頼して任せていたそうで、残された二人のお嬢様は、ご夫婦の見事な手作り作品と推察致しました。

今年の秋に、次女の方も嫁がれて、広い家に一人暮らしになった佐久間さんですが、週末には、お嬢様達が、ご主人と一緒に訪れ(私が伺った日も長女ご夫婦がいらして、おいしい手料理をご馳走になりました)前回、たよりに書いて頂いたように、ハチヤモリの同居者もいて、チャターの調べで(日本チャター協会会員)を聞きながら庭に來る野鳥をながめ(日本野鳥の会会員)ながら好きなお酒を飲む、という優雅な生活です。

これからも何かと美紗の会の支えになって下さい。最後に先生からのお言葉です。

佐久間さんのことは、現在ニュージャージにお住まいの高橋さんから「僕の後釜に、東大出のクールな二枚目が来ますから」と紹介されたせいでしょうか?やはり第一印象というのは強烈で、ずっとそのイメージは崩れませんでした。どちらかというと落ちこぼれ組の私にとってはまぶしい存在で、ミスをするならまれそうで、いつもピリピリしていたような気がします。小唄を始めた動機にしても「お酒を飲みながらでも気軽に唄えるから」とか「先生、小唄はそんなにまじめくさって唄うものではないですよ」とか解ったようなことを仰言つて時にはカチンと頭に來たこともありました。実際何をなさつても器用にこなす方で、小唄以外にも多才な趣味をお持ちで、何でもなんとなくこなしているようにお見受けしていました。

三越名人会

十一月二十六日、三越名人会「上方の座敷舞」に布唄先生が御出演になったので、お母様とお伺いする。さすがは名人会という事で、どの出演者も立派な舞いを披露される。「茶音頭」雪」と名曲が進んで、次に布唄先生の地方で舞の閑崎ひで女先生と名コンビによる演目は、極め付き「ぐち」。小原清歌師の胡弓も加わって、その素晴らしさは正に至芸というべき舞台。布唄先生に至つては前回の蘆湖の会をしのぐ良く透る声で、それは正に、故西松文一師の世界に迫る幽玄の唄いぶり。お母様曰く「唄う時の顔つきまで文一先生に似ていた」と。これには同行の西松孝子様もうなずかれる事しきり。それ程素晴らしさだったので。

先生の至芸に酔いしれて帰宅した後は、我が技の拙なさに気付いて反省猿の心境。もつと努力せねば、とつくづく感じた一日でした。

(増田記)

編集後記

美紗の会の会員の皆様、新年おめでとうございます。斎藤さんから編集の仕事をはきついで皆様の助けをかりながら、やっと、この頃一人立ちできるようにになりました。この仕事を通じて、会員の皆様の色々な面を知ることができました。

習い事をするということは、それだけでなく、人間関係が広がったり、楽しい飲み会が増えたり色々な体験ができるのだなあと感じております。

今年のお正月は穏やかなお天気が続きました。日本の平成九年も、お正月のお天気のようであってほしいと、祈りつつ、年頭のごあいさつと致します。

川邊 紀恵

